

実施機関名：岩手大学教育学研究科（教職大学院）
連携機関名：岩手県教育委員会、岩手県立総合教育センター

セミナー名：【NITS カフェ in Iwate】

「双方向による遠隔授業の方法 - ICT を活用した子どもたちの学びを考える - 」

開催日時：令和2年12月13日（日）9時30分～12時

開催場所：岩手県立総合教育センター（岩手県花巻市北湯口第2地割-82-1）

参加人数と参加者の属性：30名

大学院教員3名、大学院生4名、教員6名、岩手県教育委員会7名、
 岩手県立総合教育センター6名、企業関係者4名

テーマ：遠隔授業及びICTの活用

COVID-19による状況下、世界ではリモートやオンライン教育が進展し、我国でもsociety5.0として最新技術を利用した社会の変革を目指す未来社会の姿が示され、その実現が課題とされている。

この数か月の岩手大学大学院で実践した双方向的遠隔授業の取組において明らかになった知見を紹介しながら、遠隔教育の方法を考える機会としたい。

また、遠隔授業の開発において実践された教師の学び方についてディスカッションし、教師の成長の方法も共有したい。

内容

1 実践報告：「双方向による遠隔授業の方法」

- ・報告者 ①岩手大学教職大学院 熊谷 真倫 氏
- ②久慈市立久喜小学校 教諭 藤原 健太 氏
- ③九戸村立山根小学校 教諭 畑村 大輔 氏
- ・進行、ファシリテーター 岩手大学 准教授 清水 将 氏

はじめに、研究実践に取り組んだ大学院生の熊谷氏から、小規模校2校を対象に行った遠隔合同授業の実践が報告された。授業は、体育の「陸上運動（ハードル走）」で、それぞれの学校の体育館を、Skype や大型ディスプレイ、Web カメラ、パソコンまたはタブレット、スピーカーフォン等の機器を使用してつなぎ、2～6年生の久喜小学校15名、山根小学校7名、計22名の児童で行ったものである。

遠隔授業は、端末と通信環境が整えば手軽に行うことができること、児童が同じ空間に集合しなくても画面を通して互いの動きを見たり話し合ったりすることで学びの広がりが確認できたこと等が紹介された。

続いて、担任の藤原氏、畑村氏から、機器環境の設定や不具合への対応の実際、授業づくりの留意点、遠隔授業が効果的と考えられる学習例等が報告され、質疑応答や意見交流が活発に行われた。

2 遠隔授業の実演

会場の総合教育センター大会議室とサテライト会場の岩手大学教育学研究科棟演習室を、上記授業の際と同じ機器を使用して結び、遠隔授業の実演を行った。また、授業支援アプリのロイロノートを使って自分の考えをカードにメモして送ったり、画像等の資料を送ったり、保存したりする活動の実演も行った。

3 グループディスカッション

遠隔授業の可能性について、よいと感じたこと、気付きや発見、やってみたいこと、課題の4つの視点から、グループ毎に自由に情報交流を行った。

成果

○事後アンケートの結果によると、全体について（総合評価）「大変よかった」が67%、「よかった」が33%と、回答者全員から高評価を得ることができた。

○自由記述の欄には、次のような感想が寄せられた。

- ・遠隔による体育の実践は初めて見たので大変勉強になった。
- ・今後の可能性を感じた。体育などの技術系の教科の方が向いていそうなのが意外だった。
- ・遠隔授業を含め、ICTのメリットと限界を探るためにも、まずはトライしてみることが重要であると感じた。

- ・機器等ハード面の問題がクリアになれば様々可能性が広がると感じた。実技教科の ICT 活用の有効性について再認識する機会になった。
- ・発表から先生方の困り感が非常によく分かった。大変さやつまづくポイントを共有できたことが収穫だと思った。
- ・現場課題は全て教職員の方々に解決するのではなく、民間も活用して効率的かつスピーディーに解決して行くのが良いと思う。
- ・様々な職の方とグループ協議が出来てありがたかった。

アイデアや工夫したこと

- 大学院生や 20 代の若手教員に実践報告や運営の多くを委ね、活躍できるようにしたこと。
- 大学、教育機関、学校、企業関係者が共にテーブルを囲み、相互交流が深まるような場を設定したこと。
- 限られた時間でグループディスカッションが深まるように、協議の視点を示したり、付箋を活用したりしたこと。

<写真・図など>



【会場全体の様子】



【実践報告者の3名】



【グループディスカッション】



【グループディスカッション、奥の画面はサテライト会場】